

12/8(土)PM4:10-5:40 第二会場
(スノーホールA) シンポジウム4

日本人にとっての 幸せな死とは

演者：小西 達也 武蔵野大学
演者：尾角 光美 リヴォン代表
演者：郷堀 三ツ 淑徳大学
座長：今井 洋介 新潟県立がんセンター-新潟病院
座長：酒井 禎子 新潟県立看護大学

シンポジウム4 について

2016年6月5日、新潟県民会館にて開催された、日本死の臨床研究会関東甲信越支部大会において、米国でトレーニングを積み、帰国後も国内の様々な現場で活動してきたチャプレンである小西達也氏は、日本人が幸福な死を迎えるためには「内なるつながり」と「外なるつながり」が重要であると締めくくりました。

尾角光美氏は、自身の死別体験を軸として、遺族の死別の悲嘆に寄り添うだけではなく、自らのなかに新たな力を見出して歩み始めるまでの援助の場所を、既存の寺院などを利用して展開し続ける一方、近年英国ヨーク大学に学びの場を求めました。

郷堀ヨゼフ氏は、膨大な新潟山間地のご高齢の方々への調査より、日本人特有の生者と死者との間のネットワークを提唱しており、現在は研究のフィールドをアジア~東欧まで広げ、フィールドワークを実践し続けています。

2年の歳月を経て、日本と世界を並べて考えることのできるお三方に、改めて日本人にとって幸福な死のカタチについて、様々な視点から討論して頂きます。

演者プロフィール

小西達也(こにしだつや)

<略歴>

武蔵野大学教養教育部会教授。

1992年 早稲田大学大学院理工学研究科修了、2007年米国ハーバード大学神学大学院修了。東札幌病院チャプレン、岡部医院チャプレンなどを経て、2013年より現職。専門はスピリチュアルケア論、スピリチュアリティ論。日本スピリチュアルケア学会理事。

著書「仏教とスピリチュアルケア」(共著、東方出版)、「チームがん医療実践テキスト」(共著、先端医学社)、「The MASCC Textbook of Cancer Supportive Care and Survivorship」(共著、Springer)、「グリーフケア入門」(勁草書房、共著)他。



演者プロフィール

尾角光美(おかくてるみ)

一般社団法人リヴオン 代表

19歳で母を亡くす。あしなが育英会で病気、災害、自殺テロ等による遺児たちのグリーフケアに携わる。自殺予防や遺族のケアに関して、全国の自治体、学校などから講演、ワークショップに呼ばれる。2009年リヴオンを立ち上げ『102年目の母の日』(長崎出版)編著。毎年母を亡くした人に母の日を届ける。同年自殺で親をなくした子どもたちの支援スタート。石川県小松市勝光寺における「グリーフサポート連続講座」が認められ、寺院とNPOの協働を表彰する浄土宗第5回「共生・地域文化大賞」にて「共生優秀賞」受賞。リヴオンは死に直面した誰もが、必要とするサポートにつながる社会の実現を目指している。

近著に『なくしたものとつながる生き方』(サンマーク出版)



郷堀ヨゼフ(Gohori Josef)

1979年にチェコスロバキア(現在、チェコ共和国)に生まれる。新潟県上越市在住。

2000年にカレル大学社会科学部卒業後、2007年カレル大学哲学部門日本研究学科修了(修士(文学)取得)、2011年兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科(配属大学:上越教育大学)修了(博士(学術)取得)。

国際日本文化研究センター特別利用共同研究員、東北大学リサーチフェロー、上越教育大学専修研究員を経て、

現在:淑徳大学准教授のほか、上越教育大学や新潟県立看護大学等の非常勤講師。

主にターミナルケアについて研究しながら、医療と福祉の文化的背景を追究(日本仏教看護・ビハーラ学会、Society for Medical Anthropology (AAA:人類学会)、日本民俗学会、比較日本文化研究会等の会員)



主著: „From Western-rooted Professional Social Work to Buddhist Social Work“ Shukutoku ARIISW, Gakubunsha, 2017

「異界とのネットワーク」小松和彦編『進化する妖怪文化研究』せりか書房、2017

『生者と死者を結ぶネットワーク』(単著、上越教育大学出版会、2016)

『日本の高齢者を取り巻く諸相』(単著、新潟県地域総合研究所、2008)

論文:「介護施設における高齢者の社会的ネットワーク」(『教育実践学論集』10号、2009)

「比較近代死生観研究の前哨」(『比較日本文化研究』15号、2012)等